

『私心記』に見る枚方寺内町

森田 恭二

研究史をふりかえって

枚方寺内町は、本願寺末順興寺を中心とした戦国期の小都市である。

順興寺の創建年代は詳かでないが、『細川両家記』享祿二年（一五二九）条に、山崎の合戦に敗れた柳本賢治が退却した先を「河内枚方の道場」とすることから、この頃順興寺に先行する道場があったと推定されている。¹⁾

「順興寺」の名称が明らかになるのは、『天文日記』天文十二年（一五四三）九月二十九日条の「年越え夕飯於内儀有之、順興寺衆も被出候、」である。

この順興寺に、永祿二年（一五五九）十二月九日、実従が大坂より移住し、その日記『私心記』に、枚方寺内町の様子が記録されている。

鍛代敏雄氏は、「枚方寺内町の構成と機能」（『国学院雑誌』八六一

八、一九八五年）を著わして、『私心記』の検討を行なった。

鍛代敏雄氏は、枚方寺内町の概観・その住民構成・順興寺と寺内町との関係を分析した上、枚方寺内町の経済的機能として、周辺農村部との関係や宿場としての役割等を明らかにされた。枚方寺内町は、本願寺寺内町の縮小版であり、地理的条件からも本願寺教団の影響を強く受けた寺内町の典型であったとする。

鍛代敏雄氏の研究によって、枚方寺内町の存在が明らかとなり、その後の研究の基盤となった。

ついで草野顕之氏の「順興寺と枚方寺内町―一門一家寺院論への展望―」（『講座蓮如』第三卷、平凡社、一九九七年）がある。

草野顕之氏は、まず「順興寺の内部組織」を分析され、本願寺との類似性や枚方寺内町としての特徴を考察した。「順興寺と門徒・与力」の分析では、寺内有力農民に檀家総代的な地位として「長衆」が存在したことや、寺内に周辺地域出身の有力商人や水運業者、大工・鋳物師等の職人がいたことも明らかにされている。

草野顕之氏はまた、「順興寺と枚方寺内町」については、飯盛城主の安見直政・同族で交野に居た安見右近との関係および、芥川城主三好長慶・その臣松永久秀との関係を分析して、順興寺住持実徒と寺内町運営組織の関係を明らかにしている。寺院の組織的構造的な諸問題、立地の場所や境内・屋敷地・寺内などの地理的諸問題を分析することによって、地域自体あるいは地域真宗教団における機能を解明する実例とした研究であった。

本稿では、先学の研究に導かれて、順興寺住持実徒と寺内町民の関係、『私心記』に見られる枚方寺内町の生活文化、平成十四年（二〇〇二）に発見された寺内町町屋（油屋カ）⁽²⁾について考察して行きたい。

（なお『私心記』引用史料は、○印で表示して年月日を示している。）

一、順興寺住持実徒と枚方寺内町民

大坂本願寺においては、『天文日記』によると、法主証如の地位が絶対的であり、法主を頂点に寺内町支配の組織が形成されていた。

枚方寺内町においても、草野顕之氏の研究によって、順興寺の内部組織と門徒・与力についての分析が行なわれている⁽²⁾。本章では、『私心記』によって、順興寺住持実徒と寺内町民の関係について見て行きたい。

○永禄二年十二月九日条

平湯^(枚方)へ九時二行、河バタマデ、清・堅・中・大二・浄照坊・行心・三郎・與二郎被送候、勤衆五人、舟へ平湯ヨリ雑掌モタセ候、雑肴・強飯・食籠也、船、平湯ヨリ三ソウ迎ニ来候、大坂殿ヨリ六ソウ被仰付候、以上九ソウ也、夜四時二平湯へ付候、引ワタシ三盃出候、御座へ落著候也、其後飯^料殿原共ニハ汁^{三菜}五飯食候テ後四人長衆ヨビ盃ノマセ候、越前クナミ・好村宮太夫・高島四郎右衛門・村野源左衛門也、

実徒が枚方寺内町に移住したのは、永禄二年十二月九日のことであつた。

『私心記』によると、九艘の船で大坂から枚方に向い、夜枚方に上陸した。上陸地点は、寺内町付近の河岸三屋（三矢）浜ではないかと考えられる。

実徒を迎えたのは、越前クナミ（宮内カ）、好村宮太夫・高島四郎右衛門・村野源左衛門の四人の「長衆」であつた。

この「長衆」について、草野顕之氏は、寺内町の組織というより、順興寺門徒集団の「長衆」ではないかとし、枚方坊舎の創設や、以降の維持・運営に尽力していた外護的存在ではないとも推察している⁽³⁾。

寺内町の長衆と実徒の交流は繁雑に見られ、寺内町の中核である門徒集団と順興寺住持との結束が強固なものであつたといえよう。

○永禄四年九月二十六日条

朝、大坂殿へ下候、船也、三^(左)屋舟只借也、

枚方寺内町は淀川川畔の町であり、本来港湾の出入口として出来た都市であった。その港湾が『私心記』の記述により「三矢浜」付近であったことがわかる。現在も枚方市三矢町の地名が残る地点は、まさに淀川の港湾であり、そこから山手にかけて寺内町が形成されていた。

○永禄二年十二月二十六日条

朝齋、汁^二菜^三、宮大夫・四郎左衛門・孫七郎ヨブ、其後孫四郎ツレテ東ノ古坊跡萬年等^(寺カ)見物候、

この日、朝の齋の後、実徒は寺内町東側にあった古坊万年寺を訪れている。万年寺は平安初期頃からこの地にあった真言宗寺院で、現在地は意賀美神社付近と推定されている。

万年寺は江戸時代まで存在し、『河内名所図会』は、次のように書いている。

長松山万年寺

枚方天王の社頭にあり、真言宗、本尊十一面観音春日作、座像、長八寸、薬師堂薬師仏は弘法大師作、長壺寸八歩、行者堂観音

堂の傍にあり、役行者を安す、

万年寺は奈良時代創建と伝えられる真言宗寺院であったが、明治三年（一八七〇）廃仏毀釈によって廃寺となっている。

○永禄三年正月朔日条

昼雑煮一献祝也、夕飯^(註)、昼、寺内大文字屋・丸屋・越前^(同)源左衛門礼被来候、カンニテ盃出候、カン組付^(ヒラキ)、昼、寺内衆二十五人、他家交、カン同前、於御堂対面候、予下陣ニテ会也、其後、総寺中衆カン同、其後女房衆、講衆会、

永禄三年（一五六〇）正月朔日、枚方御坊（順興寺）でも、住持実徒の許に、寺内町衆の参賀が行なわれた。

参賀者に、大文字屋（高島四郎左衛門）・丸屋・越前クナミ・子源左衛門があげられている。その後、寺内衆二十五人や他家の人々が参賀している。

このうち、高島四郎左衛門・越前クナミは長衆である。

このように元日には、順興寺住持の許へ長衆をはじめ有力寺内町衆が参賀して、盃を賜わるのが恒例であったことがわかる。

○永禄三年正月十三日条

齋、汁^一菜^三、自講衆也、相伴頭人兩人、越前・宮大夫・順正、頭人ハ上ノ町與太左衛門、クラノ谷五郎左衛門、昨日樽、越前、宮

太夫吞七候、四郎左衛門故候、

永祿三年正月十三日の齋には、「長衆」の越前クナミ・好村宮太夫のほか、藏ノ谷の五郎左衛門・上ノ町興太左衛門が参加しており、上ノ町・藏ノ谷の町内にもそれぞれ有力町人がいたことがわかる。

この記事に注目した草野顕之氏は、毎月十三日と二十八日の「齋」には、頭人（担当者）と相伴者が記されており、「齋」は本願寺教団にとって重要な催しであると記している¹⁴。

「齋」には、「長衆」や有力寺内町衆が参会し、頭人は有力寺内町衆が担当したことがわかる。

○永祿三年九月十四条

山へアガル、栗餅亭ニテアリ、有酒、ソレヨリ上へアガリ、松茸ヲ取候也、

この山はどこであろうか。現在も御坊山と呼ばれる地があり、当時の順興寺のすぐ近くの山といえ、御坊山の可能性が高い。御坊山からは、枚方寺内はもちろん、淀川周辺を見渡すことができる。実従ら順興寺僧侶らは、山上で栗餅や酒を飲食したり、松茸狩をしていたと記している。

二、枚方寺内町の生活文化

大坂本願寺寺内町において、さまざまな生活文化が見られたことは周知の事実である。大坂においては、生玉宮遷宮に寺内町衆の能が上演されたり、正月十五日には、寺内町衆の綱引が行なわれたりしている。

『天文御日記』天文二十年（一五五一）正月十五日条には、大坂本願寺の御堂庭で六町衆による綱引きが行なわれたことが記されている。

昼、於御堂庭町人令綱引、一番清水町南勝北町北負、二番、北町屋南勝西町北負、三番、南町屋南負、新屋敷北勝、四番、清水町南勝北町北負、五番、南町屋南勝、西町北負、此分也、

これには、大坂本願寺寺内町の清水町、北町、北町屋、西町、南町屋、新屋敷の寺内六町衆が出て、各町対抗で綱引を競いあつていった。

天文十五年（一五四六）六月には、生玉神社遷宮の儀が行なわれているが、寺内六町の町衆が能を舞い、見物人が数万人あつたという。

於生玉神社、就遷宮之儀、今日六町衆能二番宛合十二番有也、見物数万人云々、能之仕手者何も幼者也、

枚方寺内町においても、『私心記』を通してさまざまな生活文化を見ることができる。

○永禄三年正月十一日条

今朝大文字屋四郎左衛門宿へヨビ候、行候、百疋遣候、少将何
モ不出候、飯、汁^五菜^{十二}、茶湯座敷ニテ、茶ヲ立候、後ニ雜煮、
其後ムシムギアリ、其後肴一献ニテ立候、相伴越前・宮大夫・
四郎左衛門也、源三相伴候也、

永禄三年正月十一日、実従は「長衆」の大文字屋四郎左衛門に招
かれていた。

大文字屋には「茶湯座敷」があり、茶を点でもらい、雑煮や蒸
麦も馳走されている。枚方寺内町にも、当時の茶の湯文化がひろま
っており町衆の生活文化となっていたことが、うかがえる。

実従とともに、越前クナミ・好村宮大夫・高島四郎左衛門も招か
れており、実従と「長衆」の交流が盛んであったことがわかる。

寺内町は、本願寺の僧と寺内町上層町衆の統合によって成り立っ
ていたことも窺える。

○永禄三年五月八日条

朝、鶯合候、花予立候、飯、茶湯座敷□数奇ガ、リ也、茶之後、
楊弓アリ、其後風呂アリ、

永禄三年五月八日、実従は朝から鶯合せをして自ら花を立ててい

る。鶯合せは、上杉本「洛中洛外図屏風」にも見られる風俗である。

順興寺にも「茶の湯座敷」があったことがわかる。茶の湯とともに、鶯合せや立花が、当時の寺内町の生活文化でもあったことがわかる。

○永禄三年五月二十七日条

大文字屋誘引候而、船ニテ綱引也、見物候、

この日は大文字屋に誘われて、淀川で船にて綱引をしている。遊興の一つとして、綱引の見物をして、いるのである。淀川川畔にあった枚方寺内町ならでの遊興であった。

○永禄三年四月十二日条

宮大夫、朝飯ニ宿へヨブ、汁^三菜^八、相伴、越前・宮大夫・四郎左衛門、茶子九種、其後ニ裏茶湯座敷へ行茶呑、シゲ一平家カタル、宮大夫ニ百疋遣候、後ムシムギ添肴、其後小付、一汁三菜アリ、八時過ニ帰候、

この日実従は、宮大夫邸に呼ばれて饗応を受けている。

朝飯に汁や副菜を食べ、その後、茶の湯座敷や茶の湯の接待を受けた。相伴者には、越前・宮大夫・四郎左衛門がいた。茶の湯座敷でムシムギや小付、一汁三菜の饗応を受け、八つ過時分に帰寺して

いるが、注目されるのは「シゲ一平家カタル」とあり、シゲ一検校の平家琵琶を聞いていることである。琵琶法師を招いて、それを楽しむ生活文化のあったことがわかる。上杉本『洛中洛外図屏風』にも京都巷間を行く琵琶法師一行が描かれている。

○永禄三年正月十四日条

朝、三好筑前^{〔長徳〕}へ、樽三荷三種、松永^{久秀}弾正へ、三種五荷、松山新介二、三種二荷遣候、

実従が順興寺住持として枚方寺内に居住した永禄二年（一五五九）十二月から、亡くなる永禄七年（一五六四）六月まで、中央政権は、飯盛城の三好長慶政権であった。本願寺にならって、実従も正月には、三好長慶・松永久秀・松山新介に年賀の進物を送っている。

大坂本願寺は、摂津・河内・和泉の守護権力と積極的に交流している。進物を盆暮に贈呈することは、これら守護権力と共生するための手法であったと思われる。

『天文御日記』によると、摂津和泉の守護細川氏、河内の守護畠山氏、それにこれらの地域に台頭する三好氏に対して、贈答品を送っている。

枚方順興寺の実従も河内畠山氏の権力を握る安見氏や新興の三好氏と親交を結ぼうとしている。

このころ三好長慶は、摂津芥川城に居て、河内高屋城の畠山高政

と対峙していた。

永禄二年（一五五九）五月に、長慶は高政を紀伊に追放していた守護代安見直政を攻めるため芥川城を発して河内十七箇所に出陣、八月には高屋城・飯盛城を陥落させた。

長慶は高政を高屋城に復帰させたが、高政は無断で守護代に安見直政をふたたびとり立てたため、長慶と高政はたちまち対立して、翌永禄三年、両者の対立が火を吹くことになる。

永禄三年正月、順興寺実従は芥川城に居た三好長慶・松永久秀へ進物を贈り、三好方との宥和を望んでいる（『枚方市史』第二巻）。

一方、枚方寺内町側は、畠山高政・安見直政方とも親交を結んでおり、二重外交はあるいは枚方寺内町を守るための方策であったかも知れないと考えられている。⁽⁵⁾

○永禄三年七月条

三日、三好同豊前等河内へ出候云々、即於両所有合戦云々、四国衆打死候、

二十三日、飯守人数出候テ、岡・三屋・出口地下・中振等放火候間、日中、先スル也、

すでに草野顕之氏が指摘しているように、順興寺や寺内町は、周辺の三好氏や安見氏への働きかけをしていた。⁽⁶⁾

その際、寺内町側が安見氏に接近していたのに対し、実従は三好

氏と親交を結んでいた。

草野顕之氏は、「河内国の支配権をめぐって対立する二つの勢力に、別々の組織が、それぞれあたかも寺内町の意志を代表する者であるかのように交渉している。これはいづれが河内の主権を握ったとしても、枚方寺内町が生き残る方途であり、まさしく戦国時代の知恵といふべきかもしれない。」と指摘している。⁽⁷⁾

永禄三年（一五六〇）六月、三好長慶と畠山高政の対立は再び火を吹いた。

三好長慶と弟義賢はふたたび河内の畠山高政・安見直政を攻め、十月には飯盛城・高屋城を陥落させ、河内を三好の領国として収め、高屋城に義賢を置き、長慶自身は飯盛城を新たな居城とした。同時に長慶の家臣飯盛城を新たな居城とした。同時に長慶の家臣松永久秀は大和も制服し、大和も三好領国と化した（『枚方市史』第二巻）。

『私心記』永禄三年七月条では、三日に三好長慶・三好義賢らが河内への攻撃を開始したこと、二十三日に畠山高政・安見直政方が反撃に出て、枚方寺内町周辺の岡・三屋（矢）・出口・中振等の集落を放火したことを記している。さいわい枚方寺内町は放火をまぬがれているが、これはこれまでの進物贈答が効を奏していると考えられる。

○永禄四年正月十七日条

一昨日十五日、宗ト・松雲・與左衛門等ホシ田^(鼠)へ行、右近ニ公^(安見)

事等申調候云々、

安見氏は河内支配の活動をはじめ、枚方寺内町へも様々な働きかけをした。これに対し、枚方寺内町は安見氏に近い宗トを中心に、松雲・油屋与左衛門の三名が安見右近のいる星田へ出かけている。草野顕之氏によると、安見右近は、三好氏への対抗上、私部の私宅を離れ、星田に陣をはつていたと推定している。⁽⁸⁾

○永禄四年三月二十二日条

大文字屋四郎左衛門、今朝、親之七年ヲ取越、齋ヲ可仕候由候間、サセ候、汁^{三菜}菓子^八、相伴、順誓・順正・四郎左藏源右衛門也、

大文字屋四郎左衛門が亡親の七回忌を挙行し、齋を催している。齋は寺院の重要儀礼であって、亡親の七回忌を実従の許可を得て、実施している。

○永禄四年六月九日条

連歌シ候、安竹発句、菊泉・道観・越後・聖安寺也、昼、麦又夕飯^{社三}百韻也、

○永禄四年六月二十日条

肥前宿へ行候テ、有連歌、菊泉、越後計也、昼麦アリ、夕飯、茶湯心ニシテ小ツケアリ、四十六句スル也、六時前ハテ候、

連歌は、貴族社会に始まり、南北朝期には二条良基らが活躍する。

室町期になると、貴族や僧侶はもちろん、各地の守護大名や配下の国人・土豪に広まった。これは寄合の文芸として、茶の湯や立花とともに和歌会、連歌会が室町時代の生活文化となったためである。特に連歌会は戦国大名とその家臣達の寄合の文芸として愛好された。

永禄四年六月九日の連歌会では、安竹なるものが発句を詠んでいるが、草野顕之氏はこれを医師と推定している。⁽⁹⁾

同年六月二十日は、肥前宿で連歌会があり、四十六句を詠んだと記している。草野顕之氏によると、「肥前」は下間頼栄、「越後」は下間頼隆と推定されている。実従は近臣らと共に昼麦、夕飯を食べ、茶の湯の心にして小漬を食したと記している。

○永禄四年十一月十二日条

朝、連歌アリ、予発句、御仏事満足之儀也、昼ハ過マデ、

連歌はたびたび催されているが、この日実従が発句を呼んでいることから、順興寺内の連歌会と考えられる。

このように、枚方寺内町においても順興寺やその周辺でたびたび連歌会が催されている。

実従自身が主催して連歌会を催したり、側近の下間氏らと共に連歌会を催している。

連歌会の記事は、町衆主催の連歌会は未だ見られず、公家文化や武家文化に触れた本願寺教団の人々の生活文化となっていたことが窺える。

○永禄四年十一月八日条

朝粥、點心スル也、町衆相伴二十六七八人ヨブ、

點心は、正食の前に摂る簡単な食事を意味し、茶の湯の文化の中で、季節に応じた點心が愛好された。茶の湯では、懐石とは別で、一度に盛り合わせて出すお弁当、おしのぎなどを點心と呼んでいる。ここでも町衆二十数人を呼んでいることから、茶の湯の點心と考えられる。

○永禄三年七月十五日条

昼、町之者、子共ヲドルベキ由候間、御堂之庭ニテヲドラセ候、夜ル又風流之様ニ能ヨシ候、タツテサルガクナドスル也、

永禄三年七月十五日条によると、枚方寺内町の町の者や子供が「風流踊」を堂の庭にて行なっている。盂蘭盆の夜であった。その後サルガク（猿楽）等も行なつたと記している。

○永禄四年七月十九日条

八時過、御堂之庭ニテ、ヲドリアリ、下町・蔵谷・上町、此分案内次第申出候処、蔵谷一番出候、曲事之由申候、次下町、次上町也、後年ハクジカ、各年歟ニヲドラスベキ也、御堂之面ニ、ミスニ間カケ、女房衆一所ニ見物候也、事外群集候、白衣之衆、後年不可入候、

室町後期の祭礼芸能の大きな特徴は、「風流造り物」をはやし立てる行為が発展し、「風流踊」の大隆盛を見るところである。

町々や村々では、民衆が「風流踊」を催しはやし立てる行為によつて、神霊・仏霊を送り出したものと考えられる。その多くは盃蘭盆のあとの時期であり、念仏を伴うものと考えられる。「風流踊」は京都をはじめ、奈良、和泉などでも見られる⁽¹⁰⁾。

この頃、京都では上杉本『洛中洛外図屏風』に盃蘭盆の風流踊が見られるほか、市中で風流踊が行なわれた記録を頻見することができる。

一方奈良では、国人古市氏の城下古市郷を中心に、古市氏一族や若党らが、盃蘭盆にはさまざまに仮装して、能楽や田楽に題材をとった踊を披露している。

また、九条政基の『政基公旅引付』には、入山田郷四カ村の「風流踊」が記されている。

『私心記』永禄四年七月十九日条に見られる「ヲドリ」は、盃蘭盆の「風流踊」と考えられる。

御堂の庭において、下ノ町・蔵ノ谷・上ノ町の町衆が踊りを繰り出している。その順次をめぐって争論があつたらしく、「後年はクジか」と記している。

実従以下が見物し、「御堂之面に、御簾二間をかけ、女房衆も一緒に見物」したと書いている。

枚方寺内町は、下ノ町・蔵ノ谷・上ノ町の三町が、それぞれ惣的結合を持ち、全体として順興寺（御堂）の寺内町として結合していたことが窺える。

御堂の庭において、各町の町衆が盃蘭盆の「風流踊」を行なうという生活文化が、枚方寺内町にあつたことを示している。

○永禄三年二月三日条

昼、萬年庵^万梅見物候、樽・食籠持テ行、越前・四郎左衛門^左持来候、萬年坊主出候、

永禄三年二月三日にも、実従は万年寺に出かけて、梅見物をしている。樽酒や食籠を持参して梅見を楽しみ、側近の越前（下間頼隆）や四郎左衛門が同席し、万年寺の坊主も出迎えている。梅見や花見が、当時の生活文化にあつたことが窺えるが、この梅林は現在も残存している。

○永禄四年三月九日条

朝飯、大文字屋へ行、茶可立由候、飯、汁^四菜^七其後茶湯座敷へ行、有茶、其後面亭ニテ、ムシムギアリ、又小付^八アリ、汁二菜三アリ酒帰後、

大文字屋（高島四郎左衛門）は「長衆」の一人である。この日、実従は大文字屋で饗応を受けている。茶の湯座敷での茶会をはじめ飯・汁・菜やムシムギ、小漬、酒等を食している。

○永禄四年六月条

朔日、朝、茶湯スル也、越後・松雲・與左衛門ヨブ、夕、源三宿へヨブ間、行候、少将・安立・越後相伴、茶湯ガカリ也、夜帰候、

四日、朝、茶湯会スル也、安立・越後・四郎左衛門也、汁一葉三ツルベ也、

五日、朝飯、與左衛門宿へヨブ間、行候、鳥目五十疋遣候、飯^註茶子九種、相伴越後・源三・與左衛門也、茶湯也、

このように、『私心記』には、各所に茶の湯の記事が散見する。

永禄四年三月九日条には、実従が寺内町の大文字屋に行き、その茶の湯座敷で茶の接待を受けたほか、各種料理でもてなしを受けている。

永禄四年六月初旬には、一日に実従が越後（下間頼隆）らを呼んで、夕方には源三（下間頼榮）のもとへ行つて茶会を催している。

草野顕之氏の研究によると、『私心記』文中の源三は下間頼榮、越後は下間頼隆と推定されており、いずれも側近の下間一族である。

與左衛門は油屋與左衛門、少将は実従の子息顕従事、安立は医師、四郎左衛門は大文字屋高島四郎左衛門と推定されている。^①

実従の参加した茶会は、側近や有力町民（長衆）などを招いたり、呼ばれたりしたものである。茶の湯を通して、枚方寺内町首脳部の結束がはかられていたことがわかる。

六月四日には、実従が「茶の湯」会を催して、安立・越後・四郎左衛門を呼んでいる。

六月五日には、與左衛門に呼ばれて、越後・源三を同伴して「茶の湯」会に出席している。

このように、本願寺僧侶集団および枚方寺内町のような寺内の有力商人の間に、日常的に「茶の湯」会が催され、有力商人は、「茶の湯座敷」を造っていた。点心などの懐石料理も茶会に供応されていたこともわかる。

三、枚方寺内町発掘成果をめぐって

枚方市教育委員会では、枚方寺内町域に関わる発掘調査を進めている。

枚方市教育委員会では、「枚方寺内町遺跡」・「枚方上之町遺跡」・「万年寺山遺跡」の三地域に区分して、これまでのべ六五次の調査を実施している。

これらの調査の中で、特に注目すべきものがある。

平成十四年（二〇〇二）、枚方元町の大隆寺（法華宗）で、「枚方寺内町遺跡第14次調査」が行なわれた。調査地は、小字名を「蔵之谷」と称する地域の最北端に当る。ここは、『私心記』に出てくる枚方寺内町蔵之谷と考えられ、寺内町屋群の中にある。

調査面積は約一二〇平方メートルと狭小であったが、十六世紀後半を中心とする多くの遺構が検出された。

特に町屋の一軒と考えられる礎石建物は、少なくとも二間×三間以上、床面積五二平方メートル以上の規模の建物であったと推定されている。

内部からは二四口以上の備前焼大甕を埋設した跡が出土した。この建物は火災で焼失した跡が確認できた。

その背後に新しい掘立柱建物跡が出土し、大甕を埋設したあとに、それらを抜き取って埋め戻した痕跡が見られた。新しい掘立柱建物は、カマド跡も見られた。

いずれの建物も、甕倉として利用されたもので、おそらく焼失した甕倉と、そのあと同様の機能をもつ甕倉が造られたと考えられる。

当時、高価な備前焼大甕に貯蔵したものは、甕底に残された内容物や設置状況などから、灯火に使う荏胡麻油であった可能性が高く、



枚方寺内町油屋跡（蔵ノ谷）付近



枚方寺内町油屋址（手前の広場に店舗址が検出された。）

この甕倉は「油倉」であったと推測されている。

そこで『私心記』を紐解くと、「油屋」に関する史料が、以下のよう
に存在する。

○永禄三年九月十一日条

夕飯、茶湯会アリ、予父子飯貝・豊後・源三・油屋小五郎也、

永禄三年九月十一日に、実従父子らが催した茶の湯会には、油屋
小五郎なるものが相伴している。

○永禄三年十月五日条

朝、油屋へ上市へヨブ、茶湯也、予・飯・少同道、上市家四五
人相伴、汁^三菜^四、茶吞也、道具ミセ候、

永禄三年十一月五日に実従は油屋に行つて茶会に参席している。
この油屋はどこか不詳であるが、上市衆四・五人が相伴し、懐石料
理であるが、上市衆四・五人が相伴し、懐石料理や茶の湯のあと、
道具拝見が行なわれ、茶の湯文化が町衆達のたしなみとなったこと
がわかる。

○永禄三年十二月三日条

斎、汁^三菜^三、富田屋與左衛門・油屋□□衛門・石見ヨブ也、

永禄三年十二月三日の順興寺で行なわれた齋には、寺内町の富田屋與左衛門や石見某、それに油屋□□衛門が呼ばれている。

○永禄四年十二月十六日条

齋如常、上田道 番也、油屋新衛門（下文中断）、

永禄四年十二月十六日の順興寺の齋にも、油屋新衛門が呼ばれている。

○永禄四年八月三日

朝勤、物語、齋、如常、油屋與左衛門・四郎次郎・平野屋^{上町}、

與左衛門が油屋として現われる所である。齋を例の如く実施、そこに油屋與左衛門、四郎次郎・平野屋（甚二郎）が同席している。

油屋與左衛門は、この記事のように、実従の齋の相伴者として頻出、有力門徒であったと推定できる。

○永禄三年五月二十五日条

朝齋、越前・宮大夫・四郎左衛門・順正・空道・下上町與左衛門ヨブ、日中如常、

ここに出てくる「下上町與左衛門」は、「下之町與左衛門」とも考えられる。與左衛門は油屋としても現われ、下之町の油屋と考える。以上のように、『私心記』には、油屋新衛門・油屋與左衛門・油屋小五郎らの名前を見ることができるといえる。

この内油屋與左衛門は、有力門徒であり、実従の齋の相伴者として頻出する。また交野郡の土豪安見氏とも交渉に当たった人物である。有力門徒であり、寺内町の有力町衆である。

「枚方寺内町遺跡第14次調査」で発見された油倉址は、いずれかの人物に関わるものと考えられよう。

『私心記』永禄四年（二五六二）七月〜八月条には、「土居」の記録がある。

この頃「土居」と呼ぶものの代表は、豊臣秀吉が京都市中に廻らせた「御土居」であり、その一部は現在も見ることができるといえる。大きい所は、高さ四〜五メートル・幅二〜三メートルにも及ぶ。さらに「土居」の外側には濠や河川があるものがある。枚方寺内町には、どのような「土居」があったのかを考察しよう。

○永禄四年七月十二日条

ウラ土居ノ芝ウタセ候、雨降候、

○永禄四年七月二十四日条

ウラ土居普請シ候、

○永禄四年八月四日条

普請候、ウラドイ（土居）也、

○永禄四年八月条

六日、山崎山土居ツカセ候、昼、ソトミ候、

八日、ウラ土居クツレ候、

九日、上町屋敷ミ候、ウラホリ芝ノケ候、

十八日、今日モ普請（土居）ドイツカセ候、

十九日、今日モ普請同前也、

二十五日、ウラ土居ツキハタス、

寺内町を土居や堀がとりまくことは、各地で実証されている。枚方寺内町に、どの程度の土居や堀があったのかは、現在では不詳であるが、枚方市教育委員会の調査である程度は明らかにされている。

『私心記』永禄四年（一五六二）七月～八月、ウラ土居普請の工事が集中的に現われる。このウラ土居は、現枚方小学校付近に比定されている寺内町後方の要塞である。後方の防禦として土居が築かれたのであるが、その外側は深い堀が造られたと思われる。

枚方寺内町は、三矢の浜より丘陵を上った一帯に造られていた。そのため上之町付近では標高は四〇メートルに及び、さながら小山であった。

裏土居は、この上之町の東側に造られ、交野や津田方面からこの寺内町に入る通路があったと思われる。この通路を遮断する形で、土居が巡らされ、防衛の役割をしたものと思われる。南北は丘陵が



枚方寺内町ウラ土居堀跡推定地（左側は現枚方小学校）

崖のようになっており、容易には外敵は侵入できなかつたと思われる。

枚方寺内町と同様の丘陵上の寺内町は、河内の大ヶ塚寺内町や富田林寺内町に見ることができる。

枚方寺内町は上ノ町・下ノ町・藏ノ谷町で構成されていたが、いずれも丘陵とその谷内に形成され、四方の内南北は崖となつて要塞となつていた。東方は「土居」を造成して要塞としていた。西方は「三矢浜」の港湾に通じる道があり、何らかの防塁や門扉が造成されていたと考えられる。

むすび

以上、『私心記』に見る枚方寺内町」と題して、「一、順興寺住持実従と枚方寺内町民」、「二、枚方寺内町の生活文化」、「三、枚方寺内町発掘成果をめぐって」を考察して来た。

これまで『私心記』は、大坂本願寺の実従の日記であることから、枚方寺内町関連記事はそれほど注目されていなかった。

しかし、枚方寺内町遺跡の発掘調査成果によつて、『私心記』の枚方寺内町関連史料が、重要視されるようになった。

そこには順興寺を中心とする寺内町が形成され門徒商人と住持の密接な交流が行なわれ、茶の湯、鶯合せ、立花、平家琵琶、連歌、風流踊、梅見物などの生活文化が花開いていた。

淀川の港津であつた三矢の浜（平潟）に面して枚方寺内町が栄えていたことが明らかとなつた。

註

- (1) 鍛代敏雄氏「枚方寺内町の構成と機能」〔国学院雑誌〕八六―八、一九八五年。
- (2) 草野顕之氏「順興寺と枚方寺内町―一門一家寺院論への展望―」〔講座蓮如〕第三卷、平凡社、一九九七年。
- (3) 前掲註(2) 参照。
- (4) 前掲註(2) 参照。
- (5) 前掲註(2) 参照。
- (6) 前掲註(2) 参照。
- (7) 前掲註(2) 参照。
- (8) 前掲註(2) 参照。
- (9) 前掲註(2) 参照。
- (10) 拙稿「文献資料に見る『風流』の成立と変遷」〔帝塚山学院大学研究論集〕第三九集、二〇〇四年。
- (11) 前掲註(2) 参照。

